彙報

常置国際アルタイ学会議第二三回集会

池上二良

一九五七年第二四回国際東洋学者会議がミュンヘンで開かれたとき、そのアルタイ学部会は、アルタイ学の研究発表に十分な時間がえられないことから、アルタイ学の国際集会を行なうことをきめ、その組織を W. Heissig 教授に委嘱した。翌一九五八年六月その会がドイツのマインツで四日間にわたり開催された。そこで、すべてのアルタイ学者の間の学問上の意見交換を促進するため年一回三日から五日間の集会を開く常置国際アルタイ学会議（Permanent International Altaistic Conference）（略称ＰＩＡＣ）を設立することがきめられたのである。（以上は、当時送られてきた同教授の名による知せによった。同様の記事が Ural-Altaische Jahrbücher XXX, S. 249–251 にも載る。）その後 D. Sinor 教授が Secretary-General となり、開催地を主としてヨーロッパ内にとり、毎年開かれてきた。創立以来すでに二十年を越すが、その第二三回の会議が、一九八〇年七月二七日から八月一日までオーストリアのウィーン郊外の Strebersdorf で開催された。今回の会議の議長はウィーン大学の K. Jahn 教授である。ちなみに、一九七二年の第一五回も同じ議長が同じ場所で開いている。

筆者は、これまで一九六一年イギリスのケンブリッジで開かれた第四回と一九六九年東ベルリンで開催の第一二回に出席したが、今回、文部省の国際研究集会派遣研究員として派遣されたので、この会議について記すことにする。

今回の会議の中心テーマは「内陸アジアの文化における都市住民と遊牧民」であった。

会場は Strebersdorf の Gymnasium を使い、宿泊施設にはそこの Studentenheim（Gästehaus か）があてられた。

七月二七日参加者は、宿泊費・会費二千オーストリア・シリングを払って registration をし、まずその宿泊施設（個室）におちつき、その晩、食堂で顔合せの会食をした。今回の会議参加者はつぎに記す六〇名あまりであった。

Árpád Berta (Szeged, Hungary), James Bosson (Berkeley USA), Peggy Boyle (Manchester, England), Yuri Bregel (Israel), Bernt Brendemon (Oslo, Norway), Bess Brown (München BRD), Chieh-hsien Ch'en 陳捷先（台湾　台北）、Ch'ing-lung Ch'en 陳慶隆（台湾　台北）、Boris Chichlo (Champigny-sur-Marne,

France), J.G. Coates (Norwich, England), Francis Cooley (Cambridge, England), Mark van Damme (Utrecht, Netherlands), Abdullah T. Emiloglu (台灣 台北)′ Marcel Erdal (Jeruralem, Israel), Esin 大使夫妻 (Istanbul, Turkey), Magdi Tartar-Fosse (Oslo, Norway), Bert Fragner (Freiburg i. Br. BRD), A. von Gabain (Anger BRD), G. Hazai (Berlin DDR), W. Heissig (Bonn BRD), Paul Hyer (Provo, Utah USA), Jiro Ikegami 池上二良 (日本 札幌)′ Fahir Iz (Bebek-Intanbul, Turkey), Sechin Jagchid 札奇斯欽 (Provo, Utah USA), Gunnar Jarring (Stokholm, Sweden), A. Karahan (Istanbul, Turkey), Barbara Kellner-Heinkele (Beirut, Lebanon), Hisao Kimura 木村肥佐生 (Bellingham, Washington USA), Dick Koopman (Leiden, Netherlands), Cornelia Melles (Budapest, Hungary), K.H. Menges (Wien, Austria), Eddy Moerloose (Gent, Belgium), Ádám Molnár (Budapest, Hungary), Ane Nauta (Leiden, Holland), Lars-Erik Nyman (Bonn BRD), Rashidonduk (Bonn BRD), J. Richard (Dijon, France), Klaus Röhrborn (Giessen BRD), A. Róna-Tas (Szeged, Hungary), Claus Sagaster (Bonn BRD), Alice Sarközi (Budapest, Hungary), Schaedlinger (Wien, Austria), H. Scheinhardt (Germersheim BRD), Peter Schulz (Frankfurt am Main BRD), Osman Sertkaya (Istanbul, Turkey), D. Sinor (Bloomington, Indiana USA), Giovanni Stary (Mestre-Venezia, Italy), János Szerb (Szeged, Hungary), Ch'i T'ang 唐記 (台灣 台北)′ Talât Tekin (Beytepe- Ankara, Turkey), Ahmet Temir (Ankara, Turkey), Semih Tezcan (Ankara, Turkey), Ingeborg Thalhammer (Kleinzell, Austria), Alois van Tongerloo (Louvain, Belgium), Edward Tryjarski (Warszawa, Poland), Catharine Uray-Kőhalmi (Budapest, Hungary), I. Vásáry (Budapest, Hungary), Veronika Veit (Bonn BRD), Hans-Peter Vietze (Berlin DDR), Mary Francis Weidlich (Maryland USA), Nuri Yüce (Istanbul, Turkey).

翌二人日は′参加者一人一人が自分の研究近況を報告するPIACのしきたりのConfessionsがまず午前から午後までおこなわれた。たとえばRóna-Tasは自分のチュワシ語の新語源辞典′チュワシ語の地名辞典について報告した。木村は元代シャワく渡った蒙古人の末裔の探索の報告をした。Hyerの報告ではS.M. Shirokogoroffの遺稿がどこく行ったかについての関心が示された。またトンカラのTürk Dil Kurumu

からR.R. Arat の Kutadgu Bilig l. Metin の刊行の報もあった。この会議では英語と共にドイツ語がよく使われる。

同日、引きつづいて研究発表が開始され、三一日まで行われた。研究発表は、開会前に配られたプログラムにのる発表のうちあるものはとりやめとなり、また当日になって新らたに加えられた発表も多かった。これらを削除補足して以下に発表者と題目を掲げる。

7月28日

Röhrborn: "Zum elliptischen Gebrauch einiger Verben im Alttürkischen"

Nyman: "Modernisierungsversuche in Tibet während der Zwischenkriegszeit, 1918–1934"

Tryjarski: "Zur Frage einiger Parallelen zwischen den Bestattungsritualen der Alt-Türken und Chinesen"

Berta: "Die Terminologie der Siedlung und des Hauses bei den getauften Tataren im Wolga-Gebiet"

7月29日

von Gabain: "Ohmacht und Macht der Kazakin"

Bregel: "Nomadic and Sedentary Elements among the Turkmen"

Jagchid: "The Kitans and Their Cities"

Ikegami: "Expressions Referring to Nomadism in Chinese and Manchu"

Iz: "The Beginnings of Eastern and Western Turkish Literature: the City Dwellers and Nomads"

Sinor: "On the Word *balık* "city""

Hyer: "The Historical Significance of Köke-Khota City, Mongolia"

Uray-Kőhalmi: "Daurien: Burgen von Nomaden in Gebieten von Bauern"

Esin, Emel: "Balik, the Early Turkish City"

Ch'en, Ch'ing-lung: "Trading Activities of Turkic Peoples in China"

T'ang: "Agrarianism and Urbanism and Their Relationship to the Hsiung-nu Empire"

Molnár: The Plough and Ploughing among the Altaic Peoples"

7月30日

Menges: "Über den gegenwärtigen Stand der Erforschung des altaischen Schamanismus"

Sertkaya: "Probleme der köktürkischen Geschichte: der Name 'Gross-Rom=Byzanz' in den köktürkischen Inschriften"

Tongerloo: "The Structure of the Manichaean Com-

munity in the Light of Middle Iranian Loanwords in Old-Turkish"

Chichlo: La religion urbaine dans la steppe sibérienne"

Vásáry: "A Contact of the Crimean Khan Mängli Giräy with the Inhabitants of Qïrg-yer from 1478/79"

Tekin 下記を参照

Vietze 下記を参照

Kellner: "Anmerkungen zu einer bisher unbeachteten Turkmenenchronik"

Ch'en, Chieh-hsien: "A Study of the Manchu Posthumous Titles of the Ch'ing Emperors"

Weidlich: "The Status of the Word *Ulger* in Modern Mongolian"

Tatár-Fosse: "Volkslieder und Radio-Musik der mongolischen Volks-kultur"

7月31日

Yüce: "Neu festgestellte Wörter im Chworesm-türkischen"

Karahan: "Réflexions sur Khiwa, Boukhara et Samarcand dans le livre de Vámbéry intitulé "Voyage d'un Darwich prétendu en Centrale Asie"

Tezcan: "Bezeichnungen für Siedlung im Türkischen"

Temir: "Über Siedlungsgebiete der Wolga-Bulgaren bis z. 13. Jh."

発表題目は、やはり今回の会議のテーマに関するものが多かった。上掲の発表のうち、たとえば、Bregel は、トルクメン族について一六世紀と一〇世紀の間のその諸部族の大きさの変化、トルクメン族の居住地域の変化についてのべた。池上は、漢語の「遊牧」に当る満州語の語の古義は移動であり、牧の義がない（他のアルタイ語にも同様のことがある）ことと、「遊牧」は遊牧民の生活形態に対する定住農耕民の造語とみられることをのべた。Uray-Kőhalmi は、現在と比較した歴史的なソロンの住地名やソロン、カムナガンの種族名、氏族名の貴重な資料を提示した。Molnár は、農具のすきを意味する語として蒙古語の anǰasun（甫のツングース語にも入っている）、チュルク語の saban, amač, boqursï やチュワン語の aka についてのべ、これらの単語（および、くびきのすきと長方形のすき）の地理的分布にふれた。陳捷先は、満州族が漢民族文化からとり入れたものとして清の皇帝の諡号を扱った。なお、Sertkaya は古代チュルク語の PVRM (ạpạ urụm) 大ローマという語を認めてこれについてのべた。Karahan の発表は、それが Vámbéry の翻訳によっていることについて、原本に基づくべきことが Sinor からコメントされた。テーマ発表の総括のようなことはない。

しかし、上掲の発表題目のなかには、あるいは正しく伝えていないものがあるかもしれないことを恐れる。またなおTekinの発表があり、Vietzeは自分が編纂した独蒙辞典についてのべた（これについてSinorからドイツ人か蒙古人かだれが使うための辞書か質問があった）。またRóna-Tasもアルタイ語の都市を表わす語の由来について発表した。これについて筆者もコメントして南のツングース語への借用語やアイヌ語のコタンの語のことをのべた。しかしこれらの発表の題名を筆者は残念ながら書きとめていない。また筆者は席をはずしていたときもあり、上掲の発表者名、発表題目になおもれているものがあったり、あるいはとりやめになったものがひょっとして混入していたらおゆるしを願いたい。これらの発表論文は雑誌Central Asiatic Journalにのることになっている。

ＰＩＡＣという小会議の重要な意義は、この分野の各国の研究者が互に顔を合せ、個人的に話し合う機会となっていることにある。筆者もガバイン教授、メンゲス教授その他のかたがたに久しぶりにお会いできた。一方、同じ分野の研究者ではじめて会う人も少くなかった。ツングース語を研究する若いドイツ人にも会い、たくさんの質問を受けた。また、古代ウイグル語研究のRöhrborn教授は、二十年まえハンブルグで一年間ガバイン教授の授業を受けたとき一緒でまだ若い学生だったことを、Confessionのときのかれの声をきいていて思い出した。

ＰＩＡＣのメダルの今年度受賞者は、出席者の投票の結果、候補者の一人ソ連のN.A. Baskakovにきまった。またＰＩＡＣのためにThe Uralic and Altaic Department of Indiana University, Bloomington, IndianaからPIAC Newsletterが発行されているが、D. Sinorから次号記事の原稿募集の知せがあった。

七月三〇日夕に、オーストリア科学アカデミーのレセプションがウィーン旧市内の同院の大広間で開かれ、参加者一同が招かれた。また三一日午後ウィーン市内のバス観光が行なわれ、夕方からはウィーン市長の招待の晩さんがドナウ公園の“Au-Restaurant”であり、翌八月一日朝朝食後解散となった。

イセンビケ＝アルジャンル

オスマン帝国におけるアシレトとユリュクとの区別

永田雄三訳

ここに訳出し紹介しようとする論文は、トルコの中東工科